

奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について(5) —奈良に関係する茶人領主について—

About the Tea-related Historical Sites Existing near Nara Saho College Part 5 —Some Famous Tea Masters who have Domain in Nara Prefecture—

寺田 孝重
TERADA Takashige

前稿¹⁾に続いて、本学近辺の「茶」に関する史跡を紹介する。今回は、奈良県に
ある茶人について紹介する。

キーワード：慶長国郷帳、中坊秀政、桑山宗仙、小堀遠州、片桐石州、藤林宗源、織田有
楽齋、古田織部

Key Words : The Cadaster Registers of Keicho-Period, Hidemasa Nakanobou, Sosen Kuwayama,
Enshu Kobori, Sekishu Katagiri, Sogen Fujibayashi, Urakusai Oda, Oribe Furuta

1. はじめに

本学が位置する奈良市地域は、日本の文化発祥地であり、文化遺跡が多数存在している
ことは、周知の事実であるが、奈良は現在の茶道（佗茶の湯）が形成される重要な舞台で
もあった。前稿^{1) 2) 3) 4)}までに、特に茶に関連した史跡を紹介してきた。その中で茶人
として、すでに、「佗茶の湯」の祖と呼ばれる村田珠光、「珠光一の弟子」とされる古市澄
胤、珠光名物を伝承し、千利休などが珠光の業績を顕彰していく経緯を記録した『松屋会
記』や『茶道四祖伝書』を残す松屋一族を取り上げてきたが、今回は、奈良県地域に関係
のある茶人領主たちを紹介する。またその大部分が「大和国著聞記：寛永七年高付」に記
録されているので、これに沿った形で紹介を地域ごとに進めたい。

2. 「大和国著聞記：寛永七年高付」（慶長大和国郷帳^{注1)}、序中漫録^{注2)}）

奈良県には、江戸時代初期に奈良奉行所の与力の職を勤めた玉井定時とその子孫によっ
て作成された78巻に及ぶ文書群『序中漫録』がある。その中に含まれる「大和国著聞
記：寛永七年高付」は、寛永7年（1630）に書写されたものであるが、実態は慶長5年
（1600）の関ヶ原の戦い以降、同12年（1607）にかけての大和国における領主名と知行
高を記録したものであると考えられ、「慶長大和国郷帳」とも称されている。（以下、「大
和国著聞記：寛永七年高付」を「慶長国郷帳」と記す）

3. 奈良北町

拙稿の第2稿³⁾で取り上げた『松屋会記』にしばしば登場する人物に、井上や中坊を
姓とする人々がある。井上とは、豊臣秀長の奈良代官であった井上源吾のことで中坊とは、
徳川政権下での初代奈良奉行となったと言われる中坊左近秀政（飛騨守）など、その職を
継承している中坊一族のことである。これらの人々は、茶の湯に造詣の深い人物であった
と考えられる。

井上源吾は椿井町にあった中坊氏の屋敷を政庁として政務を行っており、徳川幕府に奈
良奉行職を任命された中坊左近秀政も当初は自宅を奉行屋敷としていたが、のちに奉行所
を造営した。この奈良奉行所は、図1に示した現在の奈良女子大学の所在地にあり、中坊
氏の邸宅はここから郡山城への道筋の椿井町あたりにあったと言われている。つまり、
『松屋会記』に出てくる茶会がこの辺りで持たれていたことになる^{注3)}。

3-1 中坊左近秀政

中坊左近秀政の領地は、「慶長国郷帳」では吉野郡西増村（現、大淀町）や比曾村（現、大淀町）などで約 3500 石、同じく吉野郡馬佐村（現、大淀町）などで約 1500 石の知行が記されている。ただ、代官支配と知行の区別はなされていないので領地の大きさは判然としない。

中坊家^{注4)}は、興福寺衆徒であり、秀祐（飛驒守）は松永久秀（弾正）、筒井定次そして徳川家康に仕えた。彼の後継者が、徳川政権下での初代奈良奉行である左近秀政（飛驒守）で、その養嗣子が長兵衛時祐（美作守）となる。

左近秀政・長兵衛時祐の名前は、『松屋会記』に頻出しており、大和国内では、当時茶人として認められた存在であったと思われる。この他にも中坊氏の筆頭家老職にあった辻七右衛門、次席家老の服部甚助、三席家老の倉鹿野五左衛門や大乘院門跡家の中沼左京^{注5)}の名前も数多く認められ、南都茶道の裾野の広がりがうかがえる。

茶人たちの間では、中坊氏屋敷や辻氏が水門町に作った座敷^{注6)}は有名だったようで、豊臣秀長を始め、様々な人が借用して茶会を開催している。

奈良北町地域の茶人領主としてこの他に、織田信長に滅ぼされるまで大和国を支配していた松永久秀があげられる。久秀は、現在の若草中学校がある多聞山に城を築いて本拠地とし、盛んに茶の湯を行っていた。その様子が『松屋会記』に記されており^{注7)}、単なる道具収集者ではなく、茶人としても活動していた様子が伺われる。

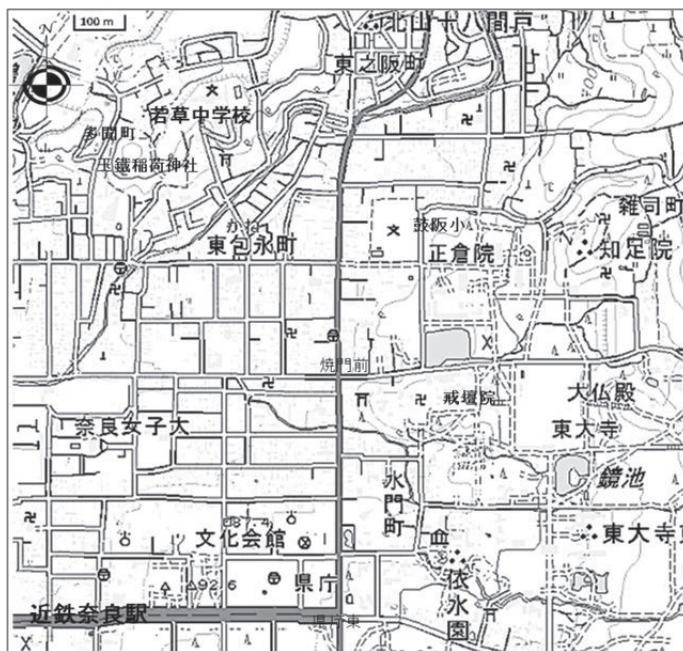


図1 奈良北町付近⁵⁾

4. 大和郡山城付近

天正 13 年 (1585) に、それまで筒井順慶の拠地であった郡山城に、秀吉の弟である豊臣秀長が 100 万石の大名として入部する。彼は、その後、官位が従二位権大納言に栄進したことから大和大納言と呼ばれる。また、豊臣政権の中で、利休の後援者として知られている。後の小堀遠州の章でくわしく述べるように秀長の茶の湯は利休直伝であり、秀長が利休を通して茶の湯に親しんだことは、家中の士にも伝わり、当時の茶道界に郡山グループと呼べる一団を形成することになった。彼らの活動は大和国のみならず、全国の茶道界に影響を与えることになる。

秀長の家老職を務めた一人に、小堀正次（新助）がおり、筆頭家老の横浜一庵^{注8)}と共に主として民政を担当した。小堀正次は関ヶ原の戦いで東軍（徳川方）に属し、合戦後、備中松山 1 万 4000 石の領主になっていたが、慶長 9 年 (1604) に死去し、その跡を継いだのが政一（作介）で、後の小堀遠州となる。

また、この時に秀長の幕僚として和歌山城代となっていたのが桑山重晴であり、彼の三男貞晴が桑山宗仙である。桑山家^{注9)}はその後も御所藩主となり、大和の大名として活動する。寛永 6 年 (1629) に本藩が無嗣断絶後も、同族の者が新庄藩（現、葛城市）として江戸中期まで存続する。さらに、小堀遠州の義父となる藤堂高虎^{注10)}も大名級家臣として豊臣家に仕えており（関ヶ原の戦いでは徳川方）、遠州に様々な影響を与えている。

4-1 桑山宗仙（左近貞晴）

桑山宗仙は、永禄 3 年 (1560) に前述の重晴の子として生まれた。そして、利休没後に

堺の屋敷を引き継いだ
 千道安^{注 11)}の茶系を、
 片桐石州に伝えた茶
 人として知られている。
 時代的には古田織部
 (重然)などと同時期
 に活躍しており、寛永
 17年(1640)の「久
 重茶会記」には細川三
 斎(忠興)から聞いた
 話に、古田織部と宗仙
 は仲が悪かったが、三
 斎が無理に織部の会に
 連れ出し、お互いにそ
 の技量を認め合って和
 解したと言う逸話⁶⁾
 も残されており、ある
 期間は両者がライバル
 関係にあった事を暗示
 している。

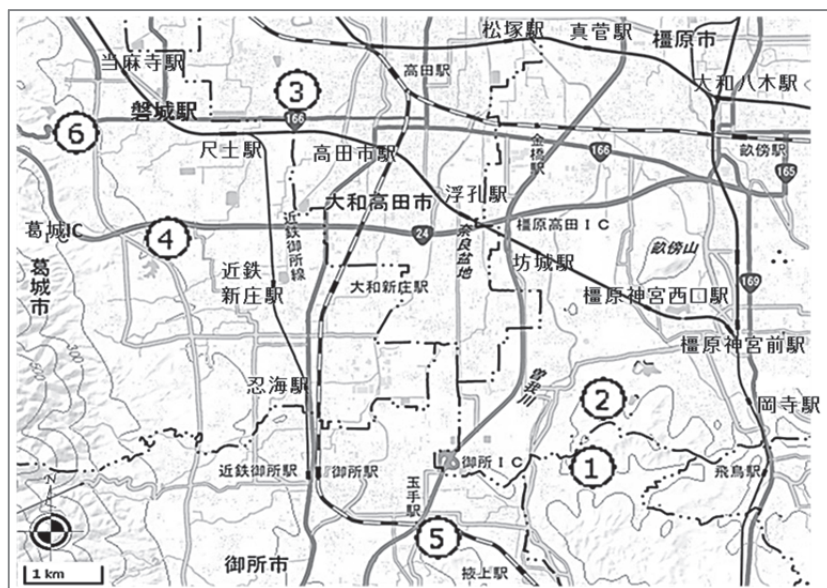


図2 桑山氏の所領⁷⁾

宗仙は、ほぼ父の重晴と行動を共にしており、所領も秀長時代より、大和国内で得ていたようである。「慶長国郷帳」では、高市郡寺崎村(現、高市郡高取町。図2①)、北越智村(現、橿原市北越智町。図2②)などや葛下郡岡崎村(現、大和高田市。図2③)、寺口村(現、葛城市中戸。図2④)などの領主として2500石余の知行が認められる。宗仙の子息とされる桑山貞利(内匠)は寛永期の高付帳で葛上郡朝町村に、同じく子息の貞寄(猪兵衛)は葛上郡玉手村(現、御所市。図2⑤)や葛下郡岡崎村、竹之内村(現、葛城市竹内。図2⑥)、寺口村の領主として名が見え、これらに共通する村々は、彼やその子孫が支配していたものと考えられる。これらのような経過から、宗仙は、大和国を舞台に一生を過ごしており、次章で述べる片桐石州や藤林宗源との出会いも、このような地縁関係から必然的に出来上がったものであろう。

天正15年(1587)に、郡山藩士としての貞晴を松屋久政が訪れている記述が「松屋久政会記」にある⁸⁾。さらに、万治3年(1660)の「宗関(石州)師会席御荘附留」等には、客に桑山貞寄の名があり⁹⁾、桑山家と片桐石州の関係が後世まで続いていたことを示している。

4-2 小堀遠州(政一)

小堀遠州は天正7年(1579)、小堀正次の長男として生まれた。前述のように、父の移動に伴って、6歳で郡山(図3)に来たが、文禄4年(1595)に秀長の養子秀保の死により大和大納言家が断絶し、父正次は秀吉の直臣となって伏見に移っているため、遠州の郡山時代は約10年ということになる。この間に利休が秀長を訪問し、茶の湯の指導を行ったことを目撃したと後に松屋に語ったことが「甫公伝書」に記されている^{注 12)}。父とともに郡山から伏見に



図3 郡山城付近¹⁰⁾

移った遠州はのちに、古田織部に茶の指導を得ることになり慶長9年（1604）に25歳で松山藩を襲封し、元和9年（1623）12月伏見奉行となった。

備中松山藩領は「慶長国郷帳」や「寛永期の国郷帳」によれば、大和国内の葛下郡穴虫村（現、香芝市穴虫）や葛上郡佐田村（現、御所市佐田）など3000石余の所領が点在している。さらに、小堀家預かりとなっている天領も添下郡（現、生駒市の一部や大和郡山市の一部）などに存在し、遠州は生涯大和国との関係を持っており、大和国各地に出向くことが多かったと思われる。これらのことが、遠州流の流祖として流派を形成する時の底流となり、前述の「甫公伝書」に見られるような、思い出話の形で語られ、遠州自身が大和を故郷^{注13)}と呼ぶことになる。

5. 大和小泉

豊臣秀頼の守役として、豊臣、徳川の間に苦勞した片桐且元の弟で、終生兄を支えたのが片桐貞隆である。

片桐家は関ヶ原の戦い後も豊臣家臣として存続し、「慶長国郷帳」では、且元が平群郡龍田村（現、生駒郡斑鳩町龍田）

など2万4600百石余、貞隆は添下郡小泉村（現、大和郡山市小泉町。図4）など7900石余の領主とされており、後に二人が大和国で大名となる下地が記録されている。

大坂の陣の後、加増されて且元は龍田藩（現、生駒郡斑鳩町龍田）（4万石）、貞隆は小泉藩（現、大和郡山市小泉町）（1万6000石）の領主として大和国に移動することになる。この貞隆の長男が貞昌でのちの片桐石州となる。

私事であるが、筆者の育った摂津国住吉郡苅田村（現、大阪市住吉区苅田）は、天正年中には信長・秀吉の茶頭として千利休、津田宗及と並んで「天下三宗匠」^{注14)}と呼ばれ

た今井宗久領であり、その後慶長初年には、片桐且元領となっている。このような関係からか、貞隆と筆者の先祖である寺田重興は交流があったらしく、彼の手紙や且元の嗣子である出雲守孝利宛の書状等が『寺田家文書』に残っている^{注15)}。

5-1 片桐石州（貞昌）

前述のように、石州は、片桐貞隆の長男として慶長10年（1605）に摂津の茨木で生まれた。寛永4年（1627）に家督を相続し、小泉藩主となる。母が今井宗久^{注16)}の嫡子宗



図4 大和小泉付近¹¹⁾



図5 慈光院の閑茶室

薫^{注17)}の娘にあたることから、堺の茶人との関係が深かったらしく、利休の長男で堺千家を継いだ千道安の弟子で、大和国の領主の一人でもあった前述の桑山宗仙に師事した。

『松屋会記』の寛永11年(1634)の条に、大和小泉の片桐石州が松屋久重や辻七右衛門らを招いた記事があり、これが石州の茶人として文献に出てくる初出と思われる。この時石州は30歳前後で、桑山宗仙表具の春屋和尚^{注18)}墨蹟を掛けている。さらに、同17年(1633)の記事では、大和小泉に遠州作の茶室があったとされ、石州が様々な茶人の影響を受けていることが判明する。正保4年(1647)の小堀遠州没後は、柳営(徳川将軍家)茶道の指導者として認められ、寛文5年(1665)に将軍家綱の茶道指南となり、諸大名の茶頭は石州流^{注19)}の者が多くなり、怡溪派、清水派など多くの流派が形成されていく。さらに、大名として流派をたてたものには松浦鎮信(鎮信流)、松平治郷(不味流)、柳沢保光(堯山、郡山石州流)などがある。

片桐石州の茶室としては、大和小泉の慈光院の閑席^{注20)}や高林庵^{注21)}及び当麻寺中之坊双塔庵^{注22)}が有名で、佗茶の湯と大名茶の融合^{注23)}が図られている。

5-2 藤林宗源(助之丞)

藤林宗源は、慶長13年(1608)に片桐且元家臣の子として生まれ、貞隆・石州に仕え、家老にまで抜擢された。桑山宗仙に石州の弟弟子として師事し、石州没後は国元の石州流を指導するだけでなく、公卿階級にまで弟子を広げ、石州流宗源派の流祖となった。「久重茶会記」では、寛永16年(1639)正月に、郡山城主である松平忠明の会に片桐石州・中坊左近秀政・中沼左京たちと出席している。また同17年には、久重が石州の朝会に参会したのち、同日の晩に宗源の会に出ている。

彼の著作には石州流茶道秘伝書である『和泉草』や『藻塩草』^{注24)}などがある。彼の流派は石州流宗源派と呼ばれるが、この門下に大坂の本庄宗敬^{注25)}があり、こちらは古石州流と称されている。

6. 戒重・柳本

織田信長の弟で、豊臣秀頼の母となった淀殿の叔父として後見役をしたことで知られるのが、織田有楽斎(長益)である。彼は、摂津国島下郡味舌(現、摂津市三島)に陣屋を持っていたが、所領の大部分は大和国に存在していた。大和や摂津国内の所領3万石を元和元年(1615)に分割し、四男・長政に戒重藩(現、桜井市戒重、図6)の後の芝村藩)、五男・尚長に柳本藩(現、天理市柳本町、図7)をそれぞれ1万石で立藩させた。自身の1万石分は、嫡男頼長が早世したので、その子の三五郎長政に後を継がせるつもりであったらしいが、孫の成長を見ないうちに有楽斎が元和7年(1621)死去したので、この分は改易となっている。「慶長国郷帳」では、まだこの分割が記録されず、有楽斎領として2万7800石余が記されており、この記録が「寛永七年高付」と書かれているが寛永(1624~1644)のものではないことを示している。



図6 戒重付近¹²⁾

6-1 織田有楽斎

有楽斎は、織田信長の弟で信秀の11男として天文16年(1547)に生まれた。本能寺の変の後、織田家の旧臣たちの間にあって、幹旋役や秀吉の御伽衆を務めているが、秀吉の没後は家康につき、関ヶ原の戦いの戦功により山辺郡に知行地を与えられた。彼の大和における所領は、「慶長国郷帳」では式上郡柳本村(現、天理市柳本)を筆頭に山辺郡で



図 7 柳本付近¹³⁾

68ヶ村が記されている。後の戒重藩や柳本藩領を加味して考えると、所領は天理市、桜井市、山添村などに分布していたことが判明する。

茶の湯については一家をなしていたらしく、秀吉の命で利休から特に台子の伝授^{注25)}を受けており、一面からすると、「利休七哲」^{注26)}より上位にいる。

有楽齋の茶室としては、建

仁寺・正伝院の如庵^{注27)}が有名であるが、小堀遠州のように大和国内に、茶室は残されていない。しかし、彼の経済的基盤が、関ヶ原の戦い以後この地にあったことは明白である。

『松屋会記』では、「久好茶会記」の慶長7年(1602)5月3日の条¹⁴⁾に有楽齋が初瀬を見回りした時に随行した記事がある。また、同14年(1609)の12月12日の条¹⁵⁾では大坂天満の有楽屋敷を久好らが訪ねており、有楽齋も奈良花入(もと古市澄胤所持)などを使用している。

有楽齋の考案した、流派を有楽流と言ひ、系譜としては頼長、長政、貞置とつながれている。特に「織田三五郎遺品分配目録」^{注28)}で知られる三五郎長政や、有楽流・貞置派を起こした織田貞置は茶道史の中で知られた存在である。貞置は、有楽齋の兄、織田信長の孫で織田家の系譜^{注29)}としては有楽齋と異なっているが、彼の所に、戒重藩主長政の娘が嫁いでおり、有楽系の織田家と関係が深かったのが有楽流を引き継いだ理由の一つであると思われる。貞置家の織田氏は、旗本高家として江戸で続いている。

大和国の大名として存続した長政・尚長の両藩では、御流として有楽流が藩内では行われたが、家元のような存在はなかったようである。現在の、有楽流家元は、戒重藩主の子孫の方が勤めておられる。

7. 天理市井戸堂

天理市井戸堂地域(図8)は、現在では茶に関係したものは残っていないが、拙稿第2稿の「2-4 古田織部と八窓庵」の章¹⁶⁾で紹介した、古田織部が大和国内で知行していた地域となる。

7-1 古田織部(重然)

古田重然は、初め織田信長に仕え、信長没後は豊臣秀吉に従ひ、天正13年(1585)従五位下織部正に叙任された。その後家康に仕え、関ヶ原の合戦には徳川方に属した。

叙任された折より山城国西ヶ岡(現、京都市南区)で3万5000石の大名であるが、「慶長国郷帳」の記載では、山辺郡井戸堂村、千済(前栽)村、上総村の3ヶ村(現、天理市)で1940石余の領地も持っている。

織部は、利休の指導の下、利休七哲の1人に数えられ同じく七哲の瀬田掃部と共に天正13年(1585)には松屋名物を見学して、佗茶の湯の勉強に励んでいる。利休没後(1591)は、秀吉の命で利休の茶を改めて武門の茶法を制定したとも伝えられ、



図 8 井戸堂付近¹⁷⁾

当時の茶道界をけん引した。その後も松屋との交流が続いており、慶長元年（1596）、同2年、同9年の「久好茶会記」に親密な関係が残されている^{18) 19) 20)}

8. おわりに

これまで5回にわたって、本学近辺にある茶関係の史跡や事跡を紹介してきた。奈良は日本の文化発祥地であり、文化遺跡が多数存在していることは、周知の事実であるが、奈良が茶と関係が深い地域であることを知り、奈良は現在の茶道（佗茶の湯）が形成される重要な舞台であったことを再認識することで、学生諸君が奈良についての理解をより深める契機となれば筆者にとってはまたとない幸いである。

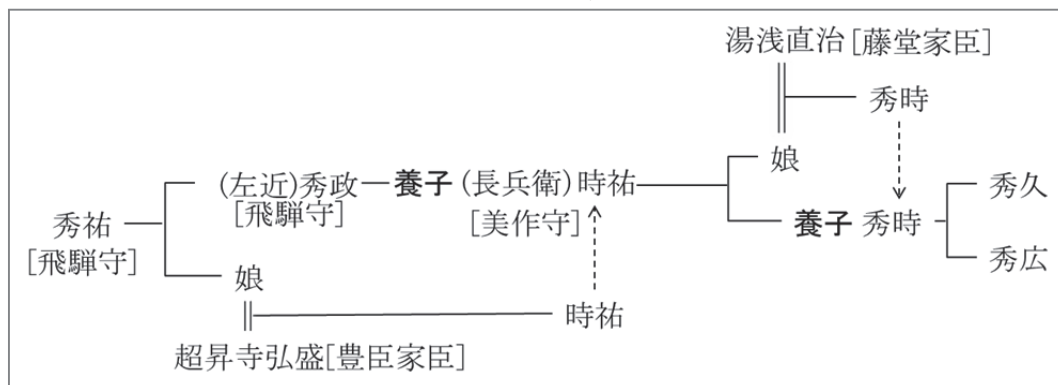
注釈

注 1) 江戸時代初期に奈良奉行所の与力の職を勤めた玉井定時とその子孫によって作成された78巻に及ぶ文書群である。大半はそれぞれ別の表題が付けられているが、後の時代に玉井家で整理された際、新たに通巻番号が付されたことにより、これら78巻の文書群を便宜上『庁中漫録』という共通の名称とし整理されている。

注 2) 郷帳とは郷村高帳の略で、村名・領主名とその地の産物石高を記したものである。江戸幕府の命で、慶長・正保・元禄・天保の4回、全国規模で国ごとの地図と郷帳が作成された。慶長期の郷帳の事業は慶長9年（1604）に開始され、短期間に調進されたものらしく、残存数がきわめて少ない。そのため、全国規模で作成されたかどうかは不明。現存する慶長郷帳は、飛騨国（岐阜）、壱岐国（長崎県壱岐市）、大和国の3つである。

注 3) 「久政茶会記」の天正14（1586）年10月6日の条²¹⁾に、豊臣秀長が中坊屋敷で口切り茶会（茶壺を開けて、その年の新茶を挽いて催される極めて格式の高い茶事）を行ったことが記されている。

注 4) 初代奈良奉行の左近秀政を中心とした中坊家系図は以下のようになる。



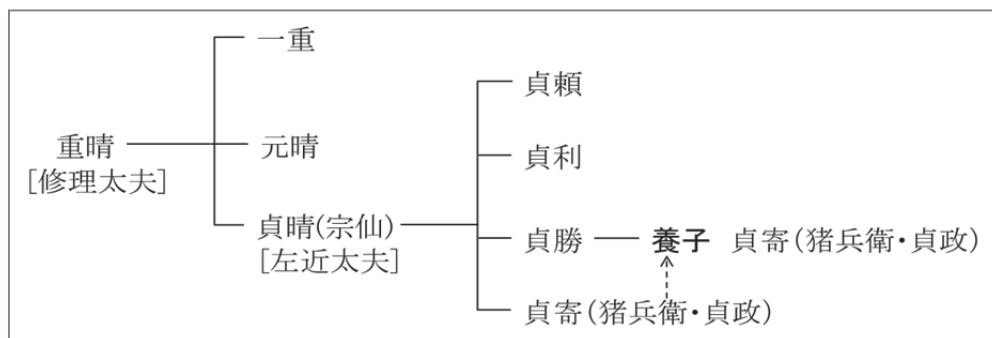
注 5) 江戸時代前期の茶人で、松花堂昭乗（石清水八幡宮の社僧で書画家）の兄。近衛家につかえ、興福寺一乗院の諸大夫である中沼家の養子となる。妻は小堀遠州の妻の妹。文筆をよくし、茶道具名物をあつめた。本姓は喜多川。名は元知。

注 6) 拙稿の「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について（2）」の「2-3 依水園と吉城園」²²⁾ 参照のこと。

注 7) 「久政茶会記」の永禄8年（1565）正月29日の条²³⁾には、多聞山での松永弾正の茶会に、堺の会合衆という自治組織（堺では貿易の品物を取り扱う倉庫を持つ豪商が多く納屋衆とも呼ばれた）の一員である松江隆仙や千利休が参会していたことが記されている。

注 8) 安土桃山時代の大名。豊臣秀長と秀保に仕え、秀長の三家老として内政を担当し、大和国内で5万石を領した。秀長領における内政は一庵と小堀正次の兩名を頂点として運営されていた。大和大納言家の断絶後は、小堀正次と同様に豊臣秀吉の直参となる。娘の一人が小堀正次の側室となっている。

注9) 桑山宗仙を中心とした桑山家の家系図は以下のようになる。



注10) 安土桃山・江戸前期の大名。津（安濃津）藩祖。浅井氏に属して15歳で初陣，やがて豊臣秀吉に認められ，天正13年（1585）紀州一揆鎮圧の功で1万石になり，その後，伊予（愛媛）宇和島7万石の藩主になった。関ヶ原の戦いでは東軍（徳川方）に味方し今治城主20万石，従四位下，和泉守となった。慶長13年（1608）伊賀（三重）と伊勢国（三重）の安濃，一志郡に20万石余を与えられ，安濃津（津市南部）に入城する。元和元年（1615）と翌年に伊勢国内で各5万石を増封され（のち5万石を山城・大和国の一部と交換），伊予国越智郡内の2万石とあわせ計32万3951石の外様大名となった。寛永2年（1625）9月22日の小堀遠州の茶会には，近衛応山，藤堂高虎，三宅亡羊の三者が揃っており，茶の湯にも長じていたことが分かる。

注11) 桃山時代の茶匠。初名は紹安。号は可休斎。利休の長男で利休と共に豊臣秀吉に仕えたが，利休の死後は堺屋敷を相続し，堺千家といわれた。茶室・道具・茶事などに独自の工夫を凝らしたといわれ，道安囲い，道安風炉などにその名が残る。

注12) 松屋久重による小堀遠州の言行録『茶道四祖伝書』の「甫公伝書」によると，正保3年（1646）6月21日に「遠州云十歳の時利休ニ逢たるよ 大和大納言殿へ太閤御成ノ給仕を十歳の時仕えたるよ 其前日ニ大納言殿へ利休見舞木綿頭巾にて茶を点大納言殿へ被教候処障子を明けてハ風ハ入りたる 杯ト御咄有之 易ハ七十歳程にて可有之候ハや五十六年程ニ成候か」と御申候²⁴⁾とある。

注13) 奈良の木津屋が所蔵していた古瀬戸肩衝を加賀の前田利常が手に入れた際、『伊勢物語』の初段の「おもほえず故郷にいとほしたなくて云々」の文にちなんで「故郷」と小堀遠州が命名している。

注14) 茶道で，三人の有名な師匠に対する称呼で，信長，秀吉の茶頭として仕えた今井宗久・津田宗及・千利休を指す。

注15) 「見事之真桑瓜三拾到来 祝着候云々」²⁵⁾と名産の真桑瓜を領主の且元家と同様に貞隆家にも届けたのであろうと思われる礼状などが残っている。

注16) 安土桃山時代の堺の豪商で茶人。号は昨夢斎。武野紹鷗たけのじょうおうに茶を学び娘婿となる。織田信長に近づいて，信長が堺に対して2万貫を出すよう命じた際には，他の会合衆を説得し，信長に従うよう働き，多くの利権を握る。のち，豊臣秀吉の茶頭となり摂津五ヶ庄で知行を得る，千利休・津田宗及とともに三宗匠と称された。

注17) 安土桃山時代～江戸時代前期の茶人。宗久の嫡子で名は兼久，また久胤ともいい，通称は帯刀左衛門。のちに宗薫と称す。号は単丁斎。父に次いで織田信長に仕え，のち豊臣秀吉の茶頭となる。子孫は旗本となり，今井家は幕末まで続いた。

注18) 春屋和尚とよばれる人は，南北朝時代の臨濟僧，相国寺二世の春屋妙葩みょうはと室町後期の臨濟僧，大徳寺百十一世の春屋宗園の2人おり，どちらの墨跡も茶席に使用されている。この場合は人間関係から春屋宗園のものと思われる。

注19) 片桐石州を開祖とする茶道の流派。江戸初期に成立。台子の作法に加えて，千利休の長男道安から桑山宗仙へと伝わった利休一畳半の茶法を，さらにその個性にあわせて工夫改良し，独自の茶風を形成，一流派を開いた。石州は，古田織部，小堀遠州に続く将軍指南として，徳川4代将軍家綱の茶の湯指導にあたった。免許皆伝を受け

た者は自分の高弟にさらに免許皆伝する権利を与えられている完全相伝制をとった石州流では、門下の逸材によって、諸派分散発展の様相は著しい。主な流派として以下のものがある。

新石州：石州の子孫によって伝えられた茶道石州流直系。8世片桐貞信^{きだのぶ}が、千家の茶風を加えて新石州を唱えた。

石州流宗家：昭和になって、14世片桐貞央が小泉城跡に高林庵を建て、改めて石州流宗家を名のった。

怡溪派：江戸初期に成立。石州の直弟子で茶僧の怡溪宗悦を祖とする。

清水派：仙台藩4代藩主、伊達綱村の茶道指南役であった馬場道斎（後の三世清水道竿）を祖とする。

鎮信派：江戸初期に成立。藤林宗源について石州流を窮めた肥前（長崎）平戸の5代藩主、松浦鎮信を祖とする。

不昧派：江戸後期に成立。出雲（島根）松江藩7代藩主松平治郷^{はるさと}を祖とする。不昧とは治郷の号である。茶の湯は石州流の伊佐幸琢に学んだが、流派にとらわれず「諸流皆我が流」を標榜した。1770年（明和7）『贅言^{むだごと}』を著して道具偏重の当世茶を批判する一方、茶の湯執心の一端を打ち明けているが、その後藩財政の好転に伴い道具収集に乗り出し、江戸後期最大の収集者となった。その品目は『雲州名物帳』（雲州蔵帳）で知られる。こうした名物道具を分類整理して『古今名物類聚』を著し、また『瀬戸陶器濫觴^{とうきざんしやう}』では陶器の歴史的研究を行うなど、単なる好事家に終始しなかった。隠居後は、江戸品川の別邸大崎園に数々の茶室を営み風流三昧の生活を送った。不昧の好んだ茶室に松江市の菅田庵や明々庵がある。小堀遠州を慕い、大徳寺孤篷庵を再興する一方、同所に自らの菩提所大円庵を建立した。

堯山派（郡山石州派）：3代大和郡山藩主柳沢保光を祖とする。保光の号堯山から堯山派ともよばれる。茶の湯に造詣が深く、赤膚焼を復興して陶業を奨励。松平治郷らと親交をむすび、茶に関する多数の書簡が「柳沢文庫」にのこる。

伊佐派：江戸初期。怡溪宗悦の高弟で宗匠の伊佐幸琢を祖とする。

宗源派：江戸初期。片桐石州の家老藤林宗源を祖とする一派。

古石州：江戸後期。宗源派の流れをくむ小泉藩士の河野宗鷗に師事した大阪天満の鉄砲組与力の本莊宗敬を祖とする一派。おもに大坂町人たちの間に流布し発展した。

注 20) 奈良県大和郡山市小泉町にある臨濟宗大徳寺派に属する慈光院内の書院西側にある3畳逆勝手向板の茶室茶室。様式は道安好みと言われる。慈光院は寛文3年（1663）片桐石州が父貞隆の菩提寺として、大徳寺185世玉舟宗璠を招いて開山とし、寺を建立、寛文8年（1668）から延宝元年（1673）までここに隠棲した。

注 21) 同じく慈光院内の書院東側にある二畳台目亭主床の茶室。二畳の控えの間を含めると四畳台目になる。いずれも重要文化財に指定されている。

注 22) 葛城市當麻にある當麻寺最古の塔頭中之坊にある茶室「丸窓席」。慶安4年（1651）片桐石州が後西天皇をもてなすために作ったと伝えられる茶室で、直径約1.8メートルにも及ぶ大きな円窓が見事な名席。

注 23) 正式な台子の茶に、佗茶の極致とされる一畳半の茶を融合させたこと。

注 24) とともに石州流の秘伝書『和泉草』は、藤林宗源が松浦鎮信に書き与えたもの。

『藻塩草』は別名『品川物語』とも言い、片桐石州が品川東海寺において語った内容を藤林宗源が書き記したものとされる。

注 25) 正式の茶の湯に用いられる四本柱の棚。風炉・茶碗・茶入れ・建水などの諸道具を載せておくもの。及台子、竹台子、真台子などの種類がある。とくに真台子は献茶式などで用いられ、真台子を用いた点前は、茶道の点前の精神的・理論的根幹を成すものと考えられており、最後に伝授される。つまり台子の伝授とは師匠が弟子にすべて伝えたと示すことと捉えられる。この時のことが、江戸中期の茶人松本見休により宝永7年（1710）に書かれた有楽流茶法と点前伝授の書『貞要集』に「織田氏台子伝来」として次のように書かれている。利休切腹から100年以上後に書かれたものた

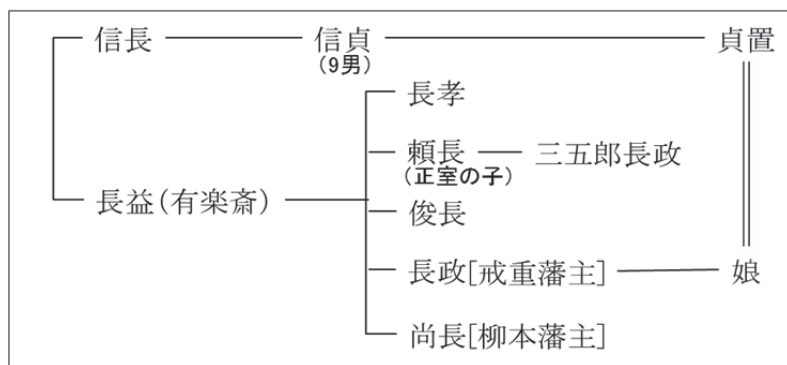
め、有楽流の権威を高めるための逸話とも否定できないが興味深い。「太閤秀吉公は台子の茶式御相伝中 秀吉公御秘蔵にて利休に誓紙を以 私に他へは伝授仕まじきよし仰付られ 台子の伝授は秀吉公御直に相伝遊ばされしなり 御相伝の衆は先関白秀次公 蒲生氏郷 細川越中守 木村常陸介 高山右近 瀬田掃部 芝山監物 七人なり 其後織田有楽公執心にて願へば有楽は年来数寄功者なれば利休直伝仕べき旨上意にて秀吉公御前において利休直に相伝せしにより有楽は右七人の外なり」²⁶⁾

注 26) 利休の高弟七人のことで、利休七人衆が古い呼称。その顔ぶれは時期により変動がある。『茶道四祖伝書』に「七人衆」として、加賀の肥前（前田利家）、蒲生氏郷、細川忠興（三斎）、古田織部、牧村兵部、高山南坊（右近）、芝山監物の 7 人をあげているのが初見である。千宗旦の子の逢源齋宗左が寛文 3 年（1663）夏に執筆した『江岑夏書』には、「利休弟子衆七人衆」として、前の 7 人のうち前田利家と瀬田掃部が入れ替えてあげている。

注 27) もと京都の建仁寺正伝院にあった茶室。元和 4 年（1618）織田有楽齋によって建てられた。円窓をあけた袖壁や、躡口を正面に現さない構えなど、特徴のある外観となっている。明治 41 年（1908）以降移転が繰り返され、昭和 46 年（1971）犬山市の有楽苑に移築された。国宝。

注 28) 織田三五郎が死去に際し、織田高重や織田貞置、千玄室らに宛てた、茶人大名の所持名物を示す貴重な資料。

注 29) 織田有楽齋を中心とした家系図は以下のようになる。



引用・参考文献

- 1) 寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について (4)」、『奈良佐保短期大学研究紀要』, 23, pp. 17-24 (2015)
- 2) 寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について (1)」、『奈良佐保短期大学研究紀要』, 20, pp.95-99 (2012)
- 3) 寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について (2)」、『奈良佐保短期大学研究紀要』, 21, pp. 73-82 (2013)
- 4) 寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について (3)」、『奈良佐保短期大学研究紀要』, 22, pp. 37-42 (2014)
- 5) 国土地理院：「電子国土基本図」 <http://maps.gsi.go.jp/#16/34.689148/135.839810/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f0> (2016.11.30) をもとに作成
- 6) 「久重茶会記 寛永 17 年 4 月 15 日」、『茶道古典全集第 9 巻』, 淡交社, p.373 (1977)
- 7) 国土地理院：「電子国土基本図」 <http://maps.gsi.go.jp/#13/34.508891/135.757027/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f0> (2016.11.30) をもとに作成
- 8) 「久政茶会記 天正 15 年正月 24 日」、『茶道古典全集第 9 巻』, 淡交社, p.129 (1977)
- 9) 「萬治二年巳亥書院之かこいにて茶之湯之留 十一月十一日ヨリ翌年三月まで 万治 3 年 3 月 10 日」、『承応万治之爾宗関公数寄屋御客御荘付』(古文書のためページ付けなし)
- 10) 国土地理院：「電子国土基本図」 <http://maps.gsi.go.jp/#16/34.645963/135.791616/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f0> (2016.11.30) をもとに作成

- 11) 国土地理院：「電子国土基本図」<http://maps.gsi.go.jp/#16/34.625324/135.777025/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f0> (2016.11.30) をもとに作成
- 12) 国土地理院：「電子国土基本図」<http://maps.gsi.go.jp/#16/34.515070/135.848994/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f0> (2016.11.30) をもとに作成
- 13) 国土地理院：「電子国土基本図」<http://maps.gsi.go.jp/#16/34.558977/135.848351/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f0> (2016.11.30) をもとに作成
- 14) 「久好茶会記」, 『茶道古典全集第 9 巻』, 淡交社, p.205 (1977)
- 15) 「久好茶会記」, 『茶道古典全集第 9 巻』, 淡交社, pp.214-215 (1977)
- 16) 寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について (2)」, 『奈良佐保短期大学研究紀要』, pp.77-78 (2014)
- 17) 国土地理院：「電子国土基本図」<http://maps.gsi.go.jp/#16/34.599382/135.828824/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f0> (2016.11.30) をもとに作成
- 18) 「久好茶会記 慶長元年 3 月 8 日」, 『茶道古典全集第 9 巻』, 淡交社, pp.187-191 (1977)
- 19) 「久好茶会記 慶長 2 年 9 月 11 日」, 『茶道古典全集第 9 巻』, 淡交社, pp.192-193 (1977)
- 20) 「久好茶会記 慶長 9 年 2 月 1 日」, 『茶道古典全集第 9 巻』, 淡交社, pp.207 (1977)
- 21) 「久政茶会記」, 『茶道古典全集第 9 巻』, 淡交社, p.125 (1977)
- 22) 寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について (2)」, 『奈良佐保短期大学研究紀要』, pp.75-77 (2014)
- 23) 「久政茶会記」, 『茶道古典全集第 9 巻』, 淡交社, pp.59-60 (1977)
- 24) 松山吟松庵校註；熊倉功夫補訂：「甫公伝書」『茶道四祖伝書（茶湯古典叢書 1）』, 思文閣, p.299 (1974)
- 25) 苅田村寺田家文書研究会編：『撰津国住吉郡苅田村 寺田家文書』, 苅田福祉会, pp.10-11 (2015)
- 26) 松本球茶軒：『貞要集 1』早稲田大学所蔵/寶永 7 年跋の写本 http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/wo09/wo09_00629/ (2016.11.30)
- 27) 有馬頼底, 稲畑汀子, 筒井絃一監修：『茶の湯の銘大百科』淡交社 (2005)
- 28) 石川松太郎, 稲垣史生, 加藤秀俊編纂：『ふるさとの人と知恵奈良（江戸時代人づくり風土記 29）』, 農山漁村文化協会 (1998)
- 29) 井口海仙, 末宗廣, 永島福太郎監修：『原色茶道大辞典』, 淡交社 (1975)
- 30) 和泉清司：「近世初期一國郷帳の研究—正保郷帳を中心に—」, 『地域政策研究』, 8 (2), pp.1-19 (2005)
- 31) 慈光院：「慈光院」, <http://www1.kcn.ne.jp/~jikoin/> (2016.11.30)
- 32) 奈良市史編集審議会編：『奈良市史 通史三』, 奈良市 (1988)
- 33) 奈良県建築士会女性委員会編：『大和茶室探訪：建築の原点を求めて』, 奈良県建築士会女性委員会 (1998)
- 34) 「承応万治之爾宗関公数寄屋御客御荘付」, 慶應義塾大学三田メディアセンター高橋箒庵文庫蔵
- 35) 「中沼左京」日本人名大事典 Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/> (2016.11.30)
- 36) 「藤堂高虎」日本大百科全書, Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/> (2016.11.30)
- 37) 「千道安」デジタル大辞泉, Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/> (2016.11.30)
- 38) 「今井宗久」デジタル大辞泉, Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/> (2016.11.30)
- 39) 「今井宗薫」日本大百科全書, Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/> (2016.11.30)
- 40) 「石州流」日本大百科全書, Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/> (2016.11.30)
- 41) 「台子」日本国語大辞典, Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/> (2016.11.30)
- 42) 「如庵」日本大百科全書, Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/> (2016.11.30)
- 43) 「利休七哲」日本大百科全書, Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/> (2016.11.30)

